

学校安全総合支援事業の取組について

—地域とともに歩む防災教育元年として「地域防災参観日」—

池田町立会染小学校

1 はじめに

会染小学校は北安曇郡池田町の南部に位置し、西側には高瀬川が流れ、北アルプスの常念岳や有明山が一望できる。このような会染地区に児童 204 名が通学している。周囲を田畑に囲まれた水源豊かな平坦地である一方、高瀬川の氾濫に不安を抱えながら生活してきた歴史がある。そのためハザードマップは、水難重視で作成されている。また、本年度は、活断層などの地震を想定した保護者への引き渡し訓練を町内 5 校園で一斉実施するなど、防災教育における連携が進んでいる。国型コミュニティ・スクールも 3 年が経ち、地域と連携して歩む防災教育への意識が徐々に高まりつつある。

2 防災教育の取組

本校は、本支援事業の指定 1 年目である。学校防災アドバイザーの先生方に指導をいただき、「地域とともに歩む防災教育元年」と位置づけ、会染コミュニティ・スクール運営協議会や池田町各地区自治防災会長会、池田町役場危機管理対策室と連携し、「池田町 5 校園引渡し訓練」を経て、地域の方や親子で防災について考え合う「会染地域防災参観日」を実施した。

3 地域防災参観日について

(1) 活動の概要

ア 日 時：令和 6 年 11 月 9 日（土） 9 時～10 時

イ 参加者：全校児童 204 名、教職員 26 名、保護者 180 名、会染コミュニティ・スクール運営協議会 13 名、自治防災会長 15 名、池田町役場危機管理対策室・池田町教育委員会 6 名、その他関係各者 9 名 計 453 名

(2) 1・2・3 学年の授業について

ア テーマ もしも地震が起きたら ～教室や校内の危険個所を見つけよう～

イ 内容

日本赤十字社作成の授業プランから、低学年は内容を共通にして各教室とも親子参加型で実施した。どうして危険なのかを考えることを通して、何気なく過ごし

ている場所に多くの危険箇所となり得る可能性が潜んでいることに気づき合う児童や保護者の姿があった。

ウ 児童の感想より

1 学年

- ・ 危ないものは高いところにおかないほうがいいと思いました。
- ・ お母さんやともだちと学校で地震のお話ができよかったです。



2 学年

- ・ 地震はたくさんのものをこわしたりけが人がでるのでこわいです。
- ・ 学校の中で地震がきたときは、ものが落ちてこないように頭を守ります。



3 学年

- ・ 避難訓練をときどきやっているけど、いつも気を付けていきたいです。
- ・ いつもはだいじょうぶだと思ってたところも危ないので気を付けたいです。



(3) 4 学年の授業について

ア テーマ 会染地域防災ハザードマップづくり（水難想定）
～地域の危険箇所を見つけよう～

イ 内容

4 学年の児童を 8 グループに分け、まず、会染小学校に隣接した地域を保護者とともに歩き、タブレットを使用して危険箇所を撮影した。教室に戻り、危険箇所の写真をマックスハブに集約し、その場所の危険な理由を共有した。その発表を聞いて、気づいたことや聞きたいことを出し合った。保護者や地域の関係者や防災アドバイザーの先生も参加し、情報を共有した。

ウ 児童の感想より

- ・ 去年、地域探検に行ったときには気づかなかったことに、今回のハザードマップづくりで気づくことができました。
- ・ どうして危険な場所だと思ったのか、それぞれのグループの見つけたわけがわかってよかったです。
- ・ さらにマップ作りを進めていきたいです。



(4) 5 学年の授業について

ア テーマ 土砂災害について学ぼう

イ 内容

県砂防事務所砂防ボランティア5名の協力をいただき、児童、保護者、地域各関係者が2教室に分かれて土砂災害についての動画を見たり講話を聞いたり防災グッズの体験をしたりした。特に、土砂災害を防ぐ堰堤の模型実験と雨の降り方についての説明や防災グッズの体験では、詳しく知らない保護者も多く、怖さとともに堰堤や砂防ダム的重要性を知ることができ大変有意義な学びとなった。さらに家庭で考え合うきっかけをつくることができたと思われる。

ウ 児童の感想より

- ・ 防災グッズは、知っていたけど使ったことがないものが多かったので、説明していただいたり体験できてよかったです。
- ・ 土砂災害のモデルを使って説明を聞くことができたので、仕組みを理解することができました。
- ・ クラスの友だちだけでなく家族や会染の地区のみなさんと一緒に防災のことを考えることができてよい参観日でした。



(5) 6 学年の授業について

ア テーマ 災害のとき自分だったらどうする ～できることを考えよう～

イ 内容

日本赤十字社の授業プランから選択し、災害時に自分だったらどうするのか、保護者とともにグループに分かれてできることを考え合った。ワークショップ形式で考えることを通して、大人の見方と子どもの見方には違いがあることが分かった。どうすれば災害への不安がなくなっていくのかを家庭に戻ってさらに考え合うきっかけをつくることができた。

ウ 児童の感想より

- ・ もしも震災がおきたら、自分はどう動いたらよいか考えることができてよかったです。
- ・ 日本は地震がおおいけど、会染地区は高瀬川の氾濫も気を付けなくてはいけない地区なので、そのこともしっかりとみんなで考えていきたいです。
- ・ 友達や家族とも一緒に考え合うことができてよかったです。
- ・ 今日は地域の方もたくさんいらっしゃっていて少し緊張したけれど、グループで災害がおきたらどうして行ったらよいのかを考え合うことができてよかったと思います。
- ・ 安心、安全に生活できるよう、これからも自分にできることを考えていきたいと思っています。



(6) 防災アドバイザー 榊原先生の御指導より

東日本大震災の教訓から、学校における防災教育の在り方について御示唆いただいた。特に危機管理体制については、避難訓練の形骸化によって判断を誤ってしまい、そのために児童や教職員の命を守れるか守れないかの岐路に立たされる局面が訪れかねないということを指導いただき、考えを深めることができた。



4 防災アドバイザーとの関わり

- (1) 5月30日(木) 池田町5校園一斉保護者引渡し訓練の参観及び指導
- (2) 7月23日(火) 校長・教頭・安全教育係への御講義
- (3) 10月22日(火) 4学年防災ハザードマップづくり授業への事前指導
- (4) 10月31日(木) 4学年タブレット動作確認授業への指導
- (5) 11月9日(土) 会染地域防災参観日の参観及び防災授業振り返りの会での御指導

5 事業の成果及び今後の課題

少子高齢化が加速する中で、学校と地域が協働し防災活動に取り組む必要性を感じている。本年度、その第一歩として公開防災参観日を実施することができた。殊に土砂災害の講演や実験、防災グッズの体験は、児童だけでなく保護者や地域の方にとっても意義ある時間であった。また、ハザードマップづくりでは、防災教育におけるICT活用の有効性を知ることができた。来年度も防災参観日等を通して地域の方に学校の防災教育への取組を理解していただくとともに、地域の防災事業に子ども達が主体的に参加できる場を検討するなど、学校と地域との連携を深めていきたい。

6 まとめ

防災教育元年として池田町の防災教育を本校が牽引できたことは大変意義深かった。今後も地域および町内の保育園・小中学校と連携し、防災教育への取組を進めたい。



長野盲学校における防災管理、防災教育の充実に向けた取組について

— 命を守る避難訓練・防災安全教育 —

長野県長野盲学校

1 はじめに

長野盲学校は、東北信地区の視覚障がいのある幼児児童生徒を対象とした特別支援学校である。明治33年（1900年）4月、「長野盲人教育所」として開所し、今年度124年目を迎えた県内の特別支援学校の中でも最も歴史の長い学校でもある。昭和35年（1960年）以来、この地（長野市北尾張部）に位置している。本校は長野市の洪水ハザードマップで3mの浸水想定地区に指定されており、長野市の福祉避難所にも指定されている。



幼児児童生徒は今年度26名が在籍しており、そのうち15名が1泊～4泊で寄宿舎を利用している。本校の特徴としては、幼稚部から成人まで幅広い年齢層の幼児児童生徒が通学していること、国家資格（あんま・指圧・マッサージ師、鍼師、灸師）をめざす理療科があること、視覚障がいのある教職員が数名いることなどがあげられる。見え方や見えにくさは一人一人異なり、全盲の幼児児童生徒は2割で残り8割は弱視である。また、知的障がいや肢体不自由等の多様な障がいを併せ有する児童生徒が理療科を除いて半数以上在籍しており、多様な対応が求められている。また、在籍幼児児童生徒の他に早期支援教室、早期教育相談、通級指導教室、東信教育事務所眼の相談室には地域在住の子どもたち約30名が定期的に通っている。

本校の幼児児童生徒が防災について見通しをもち、自分ごととして判断、行動できることを願い、本事業を利用した防災教育の取組は4年目を迎えた。

2 長野県長野盲学校の防災体制について（概要）

(1) 避難訓練（学校）

- | | |
|----------------------------------|-----------------|
| ア 第1回避難訓練（火災 避難経路の確認 消火体験 消防車見学） | 4月11日（木）10:50～ |
| イ 第2回避難訓練（地震→火事） | 9月5日（木）8:50～ |
| ウ 第3回避難訓練（火災 予告なし） | 10月31日（木）13:35～ |

※浸水時対応避難訓練は隔年実施のため今年度は行わない

※引き渡し訓練は今年度、防犯訓練として実施



〈第2回避難訓練の様子〉

(2)避難訓練（寄宿舍）

- ア 第1回避難訓練（火災 避難経路の確認） 4月16日（火）17:20～
- イ 第2回避難訓練（地震 地域の方との合同訓練） 7月8日（月）17:20～
地域の方（北尾張部地区長、石渡地区長、安協朝陽支部長、日赤奉仕団朝陽分団委員長、
消防署朝陽分団4名）と合同で実施。校庭への2次避難も実施。
- ウ 第3回避難訓練（火災 夜間） 10月23日（水）17:30～

○第2回避難訓練（地域の方との合同避難訓練）7/8 の様子から



〈救助訓練〉



〈2次避難場所（校庭）へ避難〉



〈訓練後、参加のみなさんと懇談〉

地域の方からの御意見・感想等（抜粋）

- ・ 緊急地震速報や非常ベルを実際に鳴らして行う訓練は、リアルな感じで緊張感があっていいと思う。
- ・ 生徒さんから大きな声で「助けてください」等言ってもらえるとこちらもわかるので、声を出してもらえるといい。

(3) 寄宿舍の防災学習「防災やろうぜ」

避難後の生活を考え、体験したことがある、知っているということを増やそうと、年間を通して防災学習を進めている。昨年度の炊き出し訓練、避難所体験（段ボールベッド体験）をふまえ、今年度は次の3つの体験に取り組んだ。

- ア ドラム缶風呂体験 9月5日（木） 火起こしからドラム缶風呂体験まで実施
- イ サバイバル飯体験 11月5日（火） カセットコンロを使った非常食（ごはん炊き）
- ウ 松代復興応援委員会交流 1月28日（火） 台風19号の被災体験から学ぶ

○ドラム缶風呂体験 9/5 の様子から



〈火起こし〉



〈お湯加減は？〉



〈ドラム缶風呂体験〉

○非常食づくり（ご飯炊き） 11/5 の様子から



〈カセットコンロと鍋で〉



〈カセットコンロとアイラップで〉



〈空き缶コンロで〉

○松代復興応援委員会のみなさんとの交流 1/28 の様子から



〈紙芝居と語りで台風 19 号を知る〉



〈防災ポーチの紹介〉



〈一緒に和太鼓を演奏して交流〉

(4)職員研修

「非常食を作ろう」（自由参加型研修） 1 月 7 日（火）12:00～13:30

講師：日赤奉仕団朝陽分団より 3 名

内容：ハイゼックスを使った非常食づくり

メニュー：「カレーライス」「レーズン蒸しパン」

参加者：本校職員 10 名

○非常食を作ろう 1/7 の様子から



〈講師の説明を聞く〉



〈材料を袋に詰めていく〉



〈空気が入らないよう封をして鍋へ〉

参加者の感想より（抜粋）

- ・通常の生活の中でいただいてもとてもおいしかったので、有事の際だったら、貴重な温かい食べ物になるだろうなあと思いました。
- ・こんな温かなごはん、カレーとほっこりとする蒸しパンが完成し、びっくりしました。被災したとき、温かな食事がとれることが本当にありがたいと思いました。

3 学校防災アドバイザーの関わり

(1) 福祉避難所関係者会議 第1回 11月13日(水) 14:30～15:30

内容：福祉避難所、指定福祉避難所についての共通理解（長野市福祉政策課より説明）

参加者：長野市福祉政策課2名、視覚障害者福祉協会2名、保健厚生課指導主事1名、

防災アドバイザー 白神晃子先生

本校職員5名（校長、教頭、教務主任、安全防災係長、寄宿舍代表）

(2) 福祉避難所関係者会議 第2回 12月12日(木) 13:40～15:00

内容：直接避難希望者について

指定避難所について

（終了後、避難予定個所の視察）

参加者：長野市福祉政策課2名、視覚障害者福祉協会2名、

防災アドバイザー 白神晃子先生

本校職員6名（校長、教頭、事務長、教務主任、

安全防災係長、寄宿舍代表）



〈第1回関係者会議の様子 11/13〉

4 事業の成果（○）及び今後の課題（△）

○福祉避難所開設に向け、実際に関係者で顔を合わせて会議をもつことができた。また、関係者の方に避難に使えるようなスペースを実際に見ていただくことができた。ニーズやあり方を共有する有意義な機会となった。

○職員の防災意識向上のための一歩として日赤奉仕団の協力をいただき、防災食づくりの研修が実現できた。今回は希望研修としたが、職員研修として福祉避難所設営訓練と抱き合わせでの実施も検討している。

△来年度は本校職員、関係者合同で行う福祉避難所設営訓練を予定している。年度当初に関係者で確認や打ち合わせを行い、意見を交わしながら実際場面を想定した訓練を実施したい。

5 まとめ

従来の避難訓練だけでなく、児童生徒も職員も防災意識を高め、命を守るためにどんなことができるのかを防災アドバイザーの白神晃子先生にアドバイスをいただきながら次年度の計画を作成し始めている。

来年度は学校安全総合支援事業5年目の節目にもあたるため、校内の防災教育だけでなく、本校が福祉避難所に指定されていることについて周知と意識の向上をめざしたい。

（文責 教頭 丸山 妙子）

学校安全総合支援事業の取組について

— 地震後に学校で一夜を過ごすことを想定した研修 —

長野県長野養護学校

1 長野県長野養護学校の概要

長野県長野養護学校は長野県で最初に設置された知的障がい特別支援学校で創立 60 年を越える。長野養護学校本校（長野市徳間宮東）の他に、長野ろう学校に併置の小学部三輪教室（長野市三輪）、長野盲学校に併置の高等部朝陽教室（長野市北尾張部）、旧須坂創成高校須商キャンパス校舎の高等部すざか分教室（須坂市須坂）の 3 つの分教室がある。

令和 6 年度は、本校（小学部・中学部・高等部）・小学部三輪教室・高等部朝陽教室・高等部すざか分教室に児童生徒 244 名が学んでいる。通学範囲は長野市や上水内郡をはじめ、須坂市・上高井郡、中野市・下高井郡、飯山市・下水内郡と広域であり、通学方法もスクールバス（5 台のスクールバスが長野市やその周辺市町村を網羅）や自力通学（徒歩、自転車、路線バス、電車）や付添通学など多岐にわたる。また、本校には寄宿舍があり令和 6 年度は 40 名の生徒が利用している。

本校は長野市の上野ヶ丘の中腹斜面に立地し、長野市古里や豊野方面が一望できる。令和元年度に起こった台風 19 号災害では、校舎に被害はなかったものの、周辺の被害状況を間近に感じ、防災に対する意識が高い。また近年の大雨や地震などへの対応から、防災について日頃から考え実践していく児童生徒を育てていきたいと考えている。

2 長野県長野養護学校の防災体制について（概要）

長野養護学校では、危機管理マニュアルを作成し、いざという時の体制作りを行ってきた。昨年度（令和 5 年度）は備蓄品の整理と合わせて、必要な備蓄品の種類や物資量を増やすことを重点に取り組んできた。そして、今年度（令和 6 年度）は昨年度に引き続き、教室や寄宿舍ともに避難経路や基本的な避難方法を確認する訓練、地震を想定した訓練などを行うとともに、5 月には「保護者への引渡し訓練」を実施した。

3 防災研修

(1) 地震後に学校で一夜を過ごすことを想定した研修

長野養護学校では、令和 4 年度から「保護者への引渡し訓練」に取り組み 3 年目である。5 月に実施した保護者への引渡し訓練では、本校で生活する児童生徒全員を無事に保護者に引渡しをすることができ、実施後の反省としては、児童生徒の集合場所や保護者への引継ぎ方法などについては、概ね良好な回答がある一方で、職員間の指揮連絡系統や車の誘導のための掲示物の準備不足などが課題として浮き彫りになった。さらには、実際の災害時に、保護者への引渡しがその日のうちに完了するのだろうかといった疑問の声があった。

このことから、今年度の長野養護学校では、地震発生後に保護者への引渡しができなかった児童生徒と学校職員が学校に残った場合「どのようにしたら学校で無事に一夜を過ごせるのか」といったことをテーマに体験（演習）を通した職員研修会を実施した。

具体的には、夏休み期間の7月31日に職員研修として防災アドバイザーの立正大学准教授 白神晃子先生と日本赤十字社長野県支部職員を講師に演習及び指導・助言をいただいた（以後、演習）。演習では「災害対策本部」「環境衛生班」「炊き出し班」の3つのグループを作り、地震発生シナリオに基づき次々と与えられるミッションに具体的に取り組んだ。

① 災害対策本部（管理職チーム 各部チーム※各部からの代表者で構成）

表1 本部のシナリオの一例

【状況の設定】 学校図面を使用（A3×4） ○ライフラインは、電気:停電 ガス:遮断 水道:断水 下水:不明 電話:時々通じる メール:遅れて届く 【次々とやってくるミッション】 （管理職チーム） ☐ 校内トイレの使用制限について環境衛生班に指示 ☐ かまどの設置場所を決め、対応を火起こしチームに指示 ☐ トイレや発電機の設置場所の決定と各班への対応の指示 ☐ 本部、救護室の設置場所の決定 ☐ 外部者の導線の決定 ☐ 帰宅困難児童生徒リストに基づき、 児童生徒の待機場所の決定（各部チーム） ☐ 帰宅困難児童生徒のリスト作成 ☐ 待機場所の部屋のレイアウトや使用方法の作成 ☐ 「優先的に帰宅させる教職員」の決定	 本部を木工室に設置  帰宅困難者リストの作成
--	---

災害対策本部では上記のようなミッションが次々と与えられ、その場の判断や指示が求められた。当日は教頭2人を中心に各班から寄せられる質問や判断に答えなければならないという状況に右往左往した。最初に困ったのが、トイレや発電機の設置場所について事前に決めておかなかったため、すぐに指示することができず、各班の活動に混乱を招く結果となった。次に、保健室の配置では、保健室が学校の中央部にないため本部や待機室、炊き出し場所、トイレから遠いという課題が生じ、保健室の機能を別の場所に移す必要があった。本部についても、校長室を使用したけど、部屋が狭いことや待機場所や炊き出し場所から離れているなど、本部の機能が十分に果たせないということから、演習中に本部を3回移動（校長室→正面玄関ホール→木工室）することとなった。

この他に、各部チームの「帰宅困難児童生徒のリスト作成」の際には保護者が医療従事者や福祉関係者、行政職といった場合の職業面と自宅から学校までの距離や移動時の橋や市街地の渋滞などを考慮した名簿を作成するよう助言を受けた。

② 環境衛生班（トイレチーム 電源チーム）

環境衛生班は「トイレチーム」「電源チーム」の2チームに分かれ、本部と相談しながら活動した。最初のミッションの「校内のトイレを使用禁止にする（実際の場面でも下水が壊れて使えなくなるため）」を行ったあとに「本部から指示された場所に必要な数の非常用トイレを設置する」を汗だくになりながら穴を掘ったりシートで囲むなどの作業を行った。一方で、研修会のまとめにおいて、「トイレは屋外でよかったのか?」「変化への影響が強い知的特別支援学校の子どもたちにとって、見慣れない屋外のトイレで用を足すことができるのだろうか」といった意見が出され、講師からも、学校で生活する児童生徒たちにとって建物が安全であれば、普段使っているトイレの便器に袋をかけて使用したり、簡易トイレを設置したりすることで安心したトイレ利用につながるなどの助言があった。この他にも、今回は、非常用トイレ使用時の凝固剤で固めた汚物についてプールの腰洗い槽に集めることとしたが、事前に保管場所や保管方法について決めておく必要があることがわかった。

電源チームについては、発電機の操作に戸惑いながらも発電することができたが、日頃から複数名が練習しておくことやマニュアルを備えること、定期的に燃料の量や状態（質）を確認しておくことがいざというときに役に立つということが明らかとなった。また、本校が所有する2台の発電機の電源の優先順位について、医療的ケア児生の医療機器の充電（医療機器に発電機から直接電源を取ることは破損の恐れがあるとメーカーは禁止または推奨していない）と夜間の照明や暖房といった点で優先度が高いということが明らかとなり、配置場所についても事前にしっかりと決めておく必要があることがわかった。



屋外に簡易トイレの設置



発電機の準備

③ 炊き出し班（炊事チーム 火おこしチーム）

炊事チームは、日本赤十字社長野県支部コーディネーターの指導を受けながら、水の節約を意識したビニール袋を活用した調理を行った。具体的には、研がずに炊いたごはんとホットケーキミックスを使用した蒸しパン、お菓子（ジャガリコ）を使用したポテトサラダ作りを行いおいしくできた。また、チームは調理室で作業を行ったが、災害時に調理室が使用できない場合の調理器具などの確保が今後の課題となった。



調理の様子



ポテトサラダと蒸しパンとごはん

火起こしチームについては、かまどづくりと火おこしに取り組んだが、使用できる廃材や燃料がどこにあるかが不明確でわかりにくいという意見があり、今後の準備として備蓄倉庫内への確保が必要となった。

(2) 演習をふりかえって

研修まとめの会での各グループの発表や研修会後のアンケートから、本部を中心に具体的かつ素早い指示と情報の共有、災害時を想定した事前準備の重要性が共通して挙げられた。この他には、非常用トイレに座る経験や調理活動で蒸しパンを作るなど、日々の学校生活に防災教育を取り入れていくことの必要性についても多くの意見が寄せられた。



まとめの会の様子

講師からは、災害時を想定した本部や保健室、待機場所、非常用トイレ、電源の配置などについて事前に全校で決めておくことが大切であるとの示唆をいただいた。併せて、明確な指示や指示伝達、情報共有の意識や仕組み、防災倉庫の活用、防災に関する学習を日常生活や授業に入れていくことの重要性についても助言をいただいた。

4 まとめ

今回の研修会から学んだ、災害時のための事前準備として本部や保健室、電源などの配置やルールを決めるとともに、表2の物品や図1の掲示物の用意を進めていきたい。

表2 本部設営時や各班の活動時に共通して必要な物品一覧（一部）

図1 立入禁止の掲示

□危機管理マニュアル □校内配置図 □順路案内表示板
□立ち入り禁止マーク（掲示物） □防災倉庫の物品リスト
□校内のカギ類の番号 □無線機（電話使用不可時）
□はさみ □紙 □マジック（黒や赤など複数色） □付箋
□テープ類（セロハンテープ 布ガムテープ）
□ホワイトボード □児童生徒名簿 □職員名簿



防災倉庫内の様子



非常用トイレの使用（凝固剤投入）

また、今回の演習の反省点として、本部からの指示が不明瞭であったため、指示内容が十分に伝わらずに、それぞれがどのように動いたらよいか混乱し、各班の判断で行動するといった場面があった。このことから、昨年度整備した防災倉庫内に、各班ごとのマニュアルや備蓄品の個数表などを設置し「本部からの指示を受けた後は、最初に防災倉庫に行くことで、必要な物品や動きがわかる。」という状況をあらかじめ準備しておくようにしていきたい。

この他にも、授業の一環として、例えば、非常用トイレをはじめ、防災倉庫内にある備品を実際に使用してみる経験を学習に組み込んでいくことも考えていきたい。

以上のことから、来年度は、事前準備を整えた上で、防災倉庫を活かした実践的な取り組みを行っていく。

（文責 教頭 内田潤一）

学校安全総合支援事業の取組について

—多様な障がいのある子どもたちが学ぶ学校での防災教育—

長野県松本ろう学校

1 はじめに

松本市ハザードマップより



松本ろう学校は、松本市の南東部の鉢伏山の西斜面に位置し、1 km ほど東にはM8クラスの大地震が30年以内に起きる確率が日本で最も高い14%と推定される牛伏寺断層が南北に走っている。また、1 km ほど北東部を急傾斜地特別警戒区域と土石流特別警戒区域に指定されている牛伏川が流れている。

さらに、松本ろう学校、明善小学校、明善中学校の3校が斜面に対し階段状に隣接していて、松本ろう学校グラウンド・松本ろう学校校舎・明善小学校グラウンド・明善小学校校舎・明善中学校グラウンド・明善中学校校舎が標高差およそ5 mごとの段差で接している。各段差の法面は、コンクリートで舗装されている急傾斜の面や、草で覆われた緩やかな斜面だが、大地震の際は崩壊することも想定される。3校の敷地は1本の狭い道路で接していて、車両のすれ違いの際は最徐行が必要である。そして、明善中学校を上に登ると、寿台養護学校がある。また、明善小学校と明善中学校は松本市の指定避難所となっている。

これらの条件から、災害発生時には施設設備面での被害だけでなく、子どもたちを迎えに来る保護者による交通状況の深刻な混乱や、それに伴う帰宅困難の長期化が予想される。

2 長野県松本ろう学校の特徴

早期支援教室に通う0歳児から高等部生まで幅広い年齢層の幼児児童生徒が中南信の広範囲から通学していて、日々の通学の送迎のために車で片道1時間以上を要する家庭もある。毎日の通学が困難な児童生徒は寄宿舎を利用している。また、校舎の一部を「寿台養護学校松ろうキャンパス」として寿台養護学校の病弱教育部門の児童生徒が利用している。さらに、寄宿舎を寿台養護学校知的障がい教育部門の生徒が利用している。そのため、昼は「聴覚障がいのある幼児児童生徒と病弱の児童生徒」、夜間は「聴覚障がいのある児童生徒と知的障がいのある児童生徒」と、時間帯によって異なる幼児児童生徒が過ごしている。また、医療的ケアの必要な幼児児童生徒が松本ろう学校と寿台養護学校松ろうキャンパスにいたるため、昼は看護師が5人体制でケアに当たっている。加えて、早期支援教室に通ってくる0歳から2歳までの乳幼児とその保護者、そして、教育相談や通級指導で他校へ出向く職員がいて、曜日と時間によって在校者の数が常に異なることが特徴である。

3 学校安全総合支援事業を活用した今年度の取組

昨年度に引き続き、立正大学の白神晃子先生に御指導をいただきながら、避難訓練の在り方や防災設備の活用について検討を行った。そして、これまで蓄積した経験を生かし成功を目指す訓練ではなく、実際に起こるかもしれない困難さを加えて、今までやったことのない訓練を計画し実施した。

(1) 「お迎え時刻を事前に伝えない」地震による引渡し訓練

ア 目的と想定

これまでの引渡し訓練ではお迎え時刻を事前に伝えていたため、保護者が引渡しの時間になると速やかに来校し、通常の下校時とあまり違いがない状況があった。本当の大災害が発生した場合には、交通事情の混乱により速やかなお迎えができず、学校での避難が長期化することも予想される。そこで、訓練のねらいを「学校がお迎えを依頼してから出発した場合、どれだけ幼児児童生徒が待機することになるかを把握する」「お迎えを待つ間、幼児児童生徒が安心安全に過ごすために必要なものは何かを考える」とし、保護者には、学校から連絡が来たらお迎えに出発していただくよう伝えた。また、地震が起こった際は、電気や通信が途絶え、学校と保護者で連絡が取れなくなるかもしれない。その場合を踏まえて、実際の災害時に学校では職員が幼児児童生徒の安全を確保しているので、時間がかかっても構わないのでお迎えをお願いしたいという旨を併せて伝えた。

イ 成果と課題

最後の生徒が帰宅するまでに1時間半かかったが、避難が長期化した際に楽しめそうなものを加えるなど、個々の非常持ち出しリュックの中身を確認するきっかけとなった。

また、職員一同が協力して幼児児童生徒を守る立場でありつつも、それぞれに家庭を持ち保護者や介護者という側面も持つため、職員のプライベートへの配慮も必要である。引渡しが進む中で随時職員の分担を見直し、家族への対応の必要

がある職員に帰宅をするよう指示をした。職員のお互いの家庭の状況に思いを寄せ、助け合う気持ちを確認することができた。

明善小学校との境界の方面を通るルートで保護者の車を誘導したが、実際にはそこが崩れる事が想定される。また、災害時お迎え用カードを用意し迎えの車をスムーズに各部に振り分けて誘導するなど、今後に向けた改善点が挙げられた。

(2) 「いつ起こるかわからない」地震による避難訓練

ア 目的と想定

これまでの避難訓練の経験を活かし、幼児児童生徒や職員自らが情報を得て安全に避難することを目的とし、職員にはもちろん校長にも発生時刻を教えない、予告なしの訓練を設定した。

幼児児童生徒が思い思いの場所で過ごしている2時間目の休み時間に大地震が発生したと想定し、非常階段が崩落し、主要な避難経路にガラスが飛散、電気がストップし放送機器が使えず、防火扉が誤作動で閉鎖、さらに負傷した職員が出血して廊下で倒れている状況で実施した。

イ 成果と課題

日頃からの避難訓練に慣れている職員による予想外の行動が散見した。地震発生後、避難経路の安全を確認したのち、放送が使えず各部へ避難指示を伝達するのに5分かかったが、その間に、「なかなか放送が入らないが、この天候だから体育館へ避難になるだろう。」と判断して移動を始めたり、「負傷者役の職員が倒れているけれど、ふりをしているだけだから大丈夫。」と負傷者を放置したり、「防火扉が閉まっているが、児童生徒向けのトラップだろう。」と扉の向こう側の状況を確認せず開ける場面があった。



訓練終了後の話し合いを通して、自分たちが従来の避難訓練のやり方に慣れていて、速やかに避難場所へ行くことを目的にしていることや、正常性バイアスが働き緊急事態を現実のこととして捉えにくくなっていることなどが共有できた。また、避難訓練では「幼児児童生徒が速やかな避難行動を取る体験をさせること」に意識を向けてしまう傾向があることが分かった。

(3) 「被害甚大な」寄宿舎避難訓練

ア 目的と想定

寄宿舎での年度内最終となる訓練では、夏の寄宿舎指導員研修で学んだ内容やこれまでの訓練の反省を生かして、様々な困難な状況を盛り込んだ訓練を行った。夕食後の時間帯で遅番と泊りの職員がいる状況下で大地震が発生したと想定し、

地震の影響により、壁や天井が崩れて通れない箇所が多数発生した上に、明善小学校の法面の崩落や倒木により屋外への避難経路がふさがれ職員 1 名が倒れた壁に足を挟まれ動けず、さらに電気が止まり電話が使えないという状況で実施した。

イ 成果と課題

外から学校職員が救助を試みたが、実際の被災状況を知らされていなかったのもで寄宿舎内に児童生徒と職員が閉じ込められて、どこも崩落していて入れないという設定になっていることが、現場に駆け付けてみてわかった。そのような状況下で、崩れているから通るのをすぐあきらめるのではなく、どうかして安否を確認しようと、咄嗟の判断で活路を見出そうとする動きがあった。

児童生徒たちは、一部不安定になる様子も見られたが、職員の指示を聞き、真っ暗な中で落ち着いて避難を行った。結果的にすべての児童生徒を一か所に集めての安否確認はできず、それぞれの場所で安全が確認できたということを大声で伝え合って情報を共有して終了となった。また、負傷した職員を搬出するための手が足りず、無理やり歩かせてしまったが、もしかしたら生徒の力を借りれば、安全に搬出できたかもしれない。

この訓練は、組織としてマニュアル通りに行う避難訓練というよりも、個人が状況に応じて最善を目指して行動する場面の連続で、今まで経験したことのない緊張感溢れる内容だった。困難な状況で思うように行動できない場面の連続だったが、災害時に、個々に求められる判断力について考えさせられる機会となった。

4 今後に向けた課題

(1) 組織としての備え

年度ごと更新していく幼児児童生徒と職員で、基本的な避難行動や職員の係分担任を確認するために実施していくことは大切である。マニュアルや指示に従い落ち着いて行動する姿勢が求められるが、一方で個々の判断力を求められる場面は少ないかもしれない。

(2) 個々の意識喚起としての備え

「いつ起こるかわからない」「被害甚大な」状況下で、一人一人が自分や周りの人の命を守るために臨機応変に対応することの大切さを実感した。今回のように、状況に応じた判断を求められる避難訓練は初めてだという職員が多かった。今後もこのような機会を設定することは、個々の防災対策に向けた意識喚起に有効だと思う。そして、職員だけでなく聴覚障がいのある子どもたち一人ひとりが、状況に応じて安全確保のための判断を求められる場面を設定することで、主体的に最善の行動を選ぶ経験をし防災対策への意識を高めていけるのではないだろうか。

(3) 地域課題と関連した備え

立地上の特性から、明善小学校・明善中学校・寿台養護学校とは、引渡し時の交通渋滞など災害時に発生する課題が共通することが見込まれる。地域的な課題や各学校の特性を共有し連携した上での合同引き渡し訓練の令和 7 年度実施に向けた検討がスタートしたところである。

(文責 教頭 宮坂 菜穂子)

学校安全総合支援事業の取組について

— 学校防災アドバイザー派遣・活用事業 —

長野県上田養護学校

1 はじめに

本校は、上田市の東部、東御市に近い地域にある知的障がい特別支援学校である。小学部、中学部、高等部、訪問教育部に 248 名の児童生徒が在籍している。学校のすぐ南には千曲川が流れており、児童生徒はその堤防を利用して、散歩を楽しんだりマラソンをして体を鍛えたりしている。また、学校の東側には、長和町から上田市丸子地域を流れてくる依田川との合流地点があり、学校の北側には、千曲川へ流れ込む瀬沢川が流れている。



土手を挟んで左が千曲川、右が本校

2019 年 10 月の台風 19 号の際には、大雨によって千曲川の水位が上昇し、学校も危険な状況となった。学校から約 1 km 下流の地域では越水が発生し、現在でもその地域では堤防や河川の改修工事が行われている。また、児童生徒の居住地域でも、主要道路を結ぶ橋が流されるなど、大きな被害が出た。

大きな河川の近くに立地している本校では、大雨等で水位が上昇して危険な状況になる可能性があり、その場合には、早い段階でタイムライン（学校防災行動計画）に沿って引渡しを行う等の対応が必要である。

2 長野県上田養護学校の防災体制について（概要）

「学校防災計画」「危機管理マニュアル」によって対応を考えている。防災組織は、本部、連絡、消火、搬出、安全確認、避難誘導の係を編成し、全職員で組織している。

今年度実施した安全防災に関わる訓練や研修等は以下の通りである。

- | | |
|------------------------|-----------------------|
| ・ 4 月 18 日（木）第 1 回避難訓練 | 授業中の火災想定 |
| ・ 5 月 2 日（木）緊急連絡訓練 | メール連絡網による保護者への一斉連絡訓練 |
| ・ 5 月 7 日（火）寄宿舎避難訓練 | 火災想定 |
| ・ 5 月 21 日（火）不審者対応訓練 | 授業中の安全確保 |
| ・ 7 月 2 日（火）寄宿舎避難訓練 | 地震想定 教室職員も参加 |
| ・ 7 月 5 日（金）緊急時引渡し訓練 | 大雨想定 |
| ・ 8 月 21 日（水）不審者対応研修 | スクールサポーターによる職員研修 |
| ・ 8 月 21 日（水）消火器消火訓練 | 元消防署員による職員研修 |
| ・ 9 月 20 日（金）第 2 回避難訓練 | 地震想定 |
| ・ 9 月 26 日（木）寄宿舎夜間避難訓練 | 火災想定 消防署・消防団・地元自治会長参観 |



3 学校防災アドバイザーの関わり

白神晃子先生に、7月5日に実施した引渡し訓練を参観していただき、以下のような御指導をいただいた。

(1) 「大雨」の想定に関わって

- ・大雨の場合、お互いの声が聞こえない、見えない、意思が伝わらない状況になる。
- ・校庭はぬかるんでしまう。ルートを車1台分ずらすだけでも改善する。
- ・本部はホームページ等で情報の収集を。千曲川上流のデータが大事。晴れていても下流で水位が上昇する。
- ・自治会、消防団、河川事務所、教育委員会などへの連絡を、訓練でもやるとよい。そういう動きを教頭がいなくてできるか。代替りの人ができるように。
- ・隣接地での引渡しは最善策ではあるが、川に挟まれた土地であり、怖い場所である。
- ・バスで移動して、隣接地ではなく、初めから公民館で引き渡しということも考えられる。
- ・バスの運転手がいなくてはどうするか、考えておくこと。

(2) 備蓄品・持ち出し品に関わって

- ・防災リュックが最低でもクラスに一つあるとよい。市販のものではなく、子どものことを考えて用意したい。子どもが待つために必要なグッズも大事。
- ・スクールバス内にも、小さいケースに入れて水などの備蓄品を用意しておきたい。
- ・防災リュックを用意することを「研修」としてやったらいい。防災リュックを高等部作業班で製作したらどうか。
- ・学校内の備蓄品を分散しておくといよい。

(3) 情報共有・情報収集の方法に関わって

- ・教頭が、本部を離れて各部のところへ情報を聞きに行かなければならないのは課題。
- ・トランシーバーは各部の中だけの情報になっている。本部に情報が集まっていない。
- ・小中学部が何人残っているか、随時見えるような工夫を。定時連絡を入れてもらうようにして、ホワイトボードに反映させるとよい。バスに乗って移動しそうな人数が本部で把握できる。
- ・ラインのオープンチャットで全員情報を共有したらどうか。名簿等も写真を撮って載せることができる。
- ・オクレンジャーも、職員向けに使用すれば情報を共有するツールになる。
- ・放送ではもっとゆっくり、繰り返す。トランシーバーの使い方、伝え方の研修も必要。

(4) その他

- ・職員の車の移動を、実際の時間帯でやってみること。担任が実際にどのように動くか。子どもの支援が手薄になる状況も、やってみることが大事。
- ・神川公民館への移動はスムーズだった。事前に公民館の中を見ておくといよい。どの部屋を使えるのか、部屋のどこに荷物を置くか、トイレの様子はどうかを確認しておく。児生と一緒に行って、子どものことを知っておいてもらうのも大事。
- ・各部屋のドアの隣の棚が固定されているか。棚が倒れたら出入りできなくなる。
- ・テレビモニター、給食用カートがチェーン等で壁に固定されていないので危険である。
- ・地震の時はすぐに迎えに来られない。学校に残ることも考えておかないといけない。
- ・3年に1度くらいは、保護者に対して、学校の立地についての危機感や引渡し訓練の意義を説明し、共有してもらうとよい。

引渡し訓練の様子



4 事業の成果及び今後の課題

(1) 成果

- ・学校防災アドバイザー白神晃子先生に引渡し訓練の様子を参観していただき、御指導をいただいた。
- ・中学部の保護者引渡し場所について、隣接地駐車場から神川公民館に変更することを検討中である。
- ・避難訓練の際に、消防署員、消防団員、地区の自治会長に来ていただき、助言をいただいた。外部の方々に御指導いただいたことは、自分自身の中で学校安全や防災についての意識が高まる機会となった。
- ・一箇所にまとめて置いていた備蓄品の一部を、分けて置くようにした。

(2) 課題

- ・御指導いただいたが、まだ改善できていないことがほとんどである。防災安全係を中心に取り組んでいきたい。

(文責 教頭 上條 幸絵)

寿台養護学校における防災管理、防災教育の充実にに向けた取組について

— 学校防災アドバイザー派遣・活用事業 1 年次 —

長野県寿台養護学校

1 はじめに

長野県寿台養護学校は昭和 58 年に病弱・身体虚弱特別支援学校として開校した。平成 30 年には、中信地区特別支援学校再編整備計画により、知的障がい部門の受け入れが始まり、知病併置の特別支援学校となった。

寿台養護学校には本校の他に、松本ろう学校に併置の松ろうキャンパス（病弱教育部門）、まつもと医療センター敷地内に院内教室の 3 つの学びの場がある。

令和 6 年度は、本校（小学部・中学部・高等部・あゆみ部）・松ろうキャンパス・院内教室の 3 つの学びの場で、158 名の児童生徒が学んでいる。児童生徒は、自力通学（徒歩、自転車、路線バス、電車）や保護者送迎による通学、スクールバスによる通学（スクールバス 3 台）をしている。また、松本ろう学校の敷地内に松本ろう学校と共同で利用をしている寄宿舎があり、令和 6 年度は 12 名の生徒が利用している。

本校は牛伏川の作る扇状地の出発地点である丘の中腹斜面に立地し、地域の小中学校や松本ろう学校など、4 つの学校が隣接している。

大きな地震を引き起こす可能性の高い牛伏寺断層があり、大地震への備えが必要な地域である。

災害の規模によっては、立地上アクセス路が限られるため、引き渡しまでに時間がかかることが予想されており、引渡しまで子どもたちを安心安全に待機させる場所や支援方法などについて検討する必要がある。

さらに、今後の児童生徒数の増加への対応のため、3 年をかけて校舎の増築工事が大規模に行われ、環境が大きく変わり、避難経路など工事の進捗状況に合わせて検討する必要がある時期でもある。

これらのことから、防災について学校体制を整えていくとともに、災害時の安全な行動について自ら考え実践していく児童生徒を育てていきたいと考えている。

2 長野県寿台養護学校の防災体制について（概要）

寿台養護学校では、4 月に避難経路や基本的な避難方法を確認する訓練、5 月に地震を想定した訓練、秋に休み時間での避難を想定した予告をしない訓練を毎年度実施している。

引渡し訓練は、近年のゲリラ豪雨、大雪時を想定し実施している。本校は傾斜地に建てられていることや隣の旧病院との関係により引渡し経路が狭く限られている。事故無く安全に引き渡すためには、職員、保護者ともに訓練を通して引渡しに慣れていくことが大切となる。



本校としては、3回目となる引渡し訓練となるが、繰り返し訓練を実施することで職員及び保護者の双方が災害に対する意識を高めていく機会となっている。

○避難訓練について（令和5年度）

① 第1回避難訓練：避難経路及び基本的な避難方法確認

＜火災発生想定＞ 4月25日（火）：全校

②第2回避難訓練：地震による避難及び浸水の危険による引き渡し訓練

＜地震発生想定＞ 9月1日（金）：全校

② 第3回避難訓練：休み時間での避難を想定した予告をしない訓練

＜火災発生想定＞ 10月16日（月）：全校

- ・教室以外の場所からの避難（小中学部は自由時間中、高等部は清掃中）
- ・学級に関係なく近くにいる職員が避難誘導

※避難訓練終了後、高等部は消火訓練

3 学校防災アドバイザー立正大学 白神晃子先生の関わり

7月19日（金）に来校していただき、学校施設と周辺の視察、防災教育に向けての打ち合わせを行った。学校施設の視察では、各教室やあゆみプレイルームにある棚などの固定や棚の上の物品の整理などが指摘された。また、この地域は土砂災害より浸水被害のリスクが高いため、現在1階に保管してある備蓄品の保管場所について2階、または3階へ移動した方がよいことなど助言をいただいた。

7月30日（火）の全校防災研修では、学校周辺のハザードマップを確認したり、校舎配置図から防災上の課題を確認したりしながら、職員一人一人が学校防災に対しての意識を高められるようワークショップを行っていただいた。

「非日常を想像して日常を創造しよう」と大震災が起きたことをシュミレーションしながら、自校の最も必要だと考える防災上の課題をグループで考えた。さらに、災害発生以降に想定される危険なもの（落ちる、割れる、倒れるなど）災害直後に気を付けることやトイレの心配、一晩過ごすときの過ごし方など時間の経過とともに考える必要がある課題についても気づくことができた。

最後に、今年度子どもたちとすぐにできそうな防災教育をグループで一つ決め出した。

各グループから発案された活動は以下の通り。

- ・簡易トイレを組み立てみる
- ・非常食を食べてみる
- ・避難訓練に合わせて、備蓄食を食べる
- ・水で戻したお米を食べてみる

- ・簡易トイレを使ってみる

○防災教育への取組より

① 初期消火訓練（高等部）10月18日（金）

- ・消防署の方から消火器の使い方及び消火の仕方の説明を聞いたり、模擬消火を行ったりして、消火器の基本的な使い方を知る。



② 「地震発生！学校で一晩過ごせるかな」（高等部）11月28日（木）～

○防災についてのDVDを視聴し、防災について興味を持った生徒たちが、学校にある災害備蓄品や非常食について調査を行った。調査後には、アルファ米の試食をしたり、ヨガマットで寝たり、簡易トイレに座ってみたりするなど避難生活の体験を行った。



○生徒の感想より

- ・防災グッズが意外とたくさんあることを知った。
- ・トイレが、意外と簡単に作れたのでびっくりしました。
- ・ヨガマットは、寝心地が良かった。
- ・非常食は温めなくても食べられるものがあるとわかった。おいしかった。

※生徒たちは、興味深そうに防災グッズについて手に取ってみたり、組み立てたりしていた。ヨガマットなど身近なものが避難時に役に立つことに気づいた。

③ 防災炊き出し訓練（中学部3年） 11月18日（月）事前学習 21日（木）炊き出し訓練

○保温用のアルミシートを着用し、寒さをしのいだり、簡易トイレを設置したりして、災害時の生活についてイメージが持てるようにした。また、ヒートレスカレーを食べたり、学級園で栽培した野菜で豚汁を作ったりして、防災への意識を高めた。

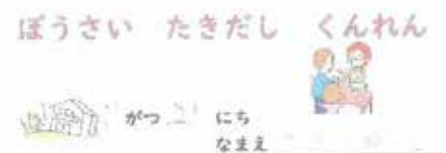




○生徒の感想より

- ・アルファ米がかんたんにかきた。
- ・防災トイレでふつうにトイレができないけど、がんばります。
- ・料理が大変だった。

※学習カードでは、非常食についてはおいしいという感想が多かったが、簡易トイレの使用について抵抗があるという感想が半数ほど寄せられた。



○をしてください

ちようり	をのしかった	ふつう	むずかしい
どんじろ	おいしい	ふつう	おいしくない
あふみまい	おいしい	ふつう	おいしくない
ひーとれす	おいしい	ふつう	おいしくない
あるみ	おいしい	ふつう	おいしくない
しーと	おいしい	ふつう	おいしくない
ぼうさい	できる	やげたくない	おり
といれ			

4 事業の成果 (○) 及び今後の課題 (△)

○全校防災研修の中で、ハザードマップを確認したり、シナリオに沿って災害時に必要な対応を考えたりすることで、職員の防災意識を高めることができた。

○研修の中で出された防災教育のアイデアを参考にして、中学部と高等部で実際に防災グッズや備蓄食を利用した実践を行うことができた。

△防災アドバイザーによる校内環境点検により指摘された改善が必要な次の箇所や児童生徒への対応について次年度対応を考えていきたい。

- ①各教室の棚の固定など安全対策
- ②災害時に引き渡しまで時間がかかった場合の待機場所の検討や安心グッズの準備等
- ③あゆみ部プレイルームのガラス面の保護、棚の固定、キャスターの固定当安全対策
- ④災害時のあゆみ部の非常用電源の確認
- ⑤災害備蓄品の保管場所の再考

△命を守る防災教育について、児童生徒の実態に合った授業や取組が各部や学級で行えるように係を核に進めていきたい。

△消費期限が迫っている備蓄食や防災グッズなどを防災教育で使うことができるように先生方へ知らせていく。また、使用した物品は計画的に補充できるように、年度初めに予算化をするようにしたい。

△アレルギー対応や偏食などにより食べられるものが限られてしまう児童生徒に対応するため、保護者と共に非常食や安心グッズを個別に準備しておけるようにしたい。

5 まとめ

今年度は、全校研修を通して、職員の防災教育への意識を高めることができた。実際に生徒が防災グッズを使用したり、備蓄食を試食したりする等具体的な体験につながった。防災教育の視点から本校の安全・防災の係案を見直し、備蓄品を授業で活用できるように消費期限が切れそうな備蓄品について係から紹介をしてもらうなどすぐに改善できそうな部分は改善をした。

今後は、アドバイザーから指摘のあった校内環境を整えたり、特性に合わせた防災への備えについて具体的に対応をしたりしたい。

また、地域の防災への取組の計画を広報やホームページから拾い出して見学をする等地域との連携を構築するための取組を始めていきたい。

(文責 教頭 楠田 真也)

飯山養護学校における防災管理・防災教育の充実にに向けた取り組みについて

—学校防災アドバイザー派遣・活用事業—

長野県飯山養護学校

1 はじめに

本校は、長野県で最北端に位置する特別支援学校である。平成3年に北信圏域（飯水・中野下高井）の知的障がいのある児童生徒の保護者の皆さんが12年間という長い歳月をかけて切望し続けて開校し、今年度で33年目を迎えた。今年度は、小学部20名、中学部14名、高等部39名の73名で「わくわく」「げんき」「えがお」あふれる学校をあいことばに学習している。寄宿舍には中学部・高等部の生徒が13名所属し、平日親元を離れて生活している。

飯山は内陸盆地型気候で、夏はとても蒸し暑く、冬は日本海からの季節風の影響で多量の降雪がもたらされ、日本有数の豪雪地帯として知られている。飯山市は2019年台風19号で千曲川が氾濫し、飯山市内でも洪水が発生した。1982年（木島地区）、1983年（常盤地区）にも洪水が発生している危険な地域でもある。飯山養護学校は1982年に決壊した樽川と千曲川に挟まれた場所にあり、ハザードマップで5～10m浸水の地域になっている。

2 長野県飯山養護学校の防災体制について（概要）

避難訓練は、火事、地震を想定し、一年に学校は3回、寄宿舍は4回実施している。1月には積雪の中で、9月には予告なしの避難訓練を実施。2019年の千曲川氾濫を受けて2020年（令和2年）から緊急時引渡し訓練を実施。今年度で5回を数える。飯山市の危機管理防災課の職員にも訓練の様子を参観してもらい助言をもらっている。

3 学校防災アドバイザーの関わり

(1) 「大雨・台風から身を守るために」令和6年9月30日（月）・職員研修

長野地方気象台 次長 松川 基 様、防災管理官 須山英則 様

ア アドバイザーを依頼した趣旨

日本列島に台風が多く上陸する時期を迎える前に、全職員が大雨や台風の基礎知識や、子どもたちの安心安全を守るために必要な台風・河川氾濫・土砂情報収集の方法を学びたいと考えたため

イ 受けたアドバイスの内容

- ・台風の基礎知識（大きさ・強さは何で決まるか？構造・進路など）
- ・気象庁ホームページによる防災情報の使い方・天気分布予報の見方（指定した市町村の防災気象情報の見方・キキクル等）

- ・平常時から、「自分のいる場所」にどのような危険が潜んでいるのか認識するよう努め、雨により、いつ、どこに、危険が迫るのかについては、気象庁のホームページで確認することが大切

ウ 学校として取り組んだ内容（改善点）

- ・台風の接近が予想できるときに、アドバイザーから教えていただいた気象庁ホームページ等で最新情報を取得した。

(2) 「飯山養護学校の防災体制の見直し」令和6年12月24日（火）・現地視察と懇談
立正大学社会福祉学部 准教授 白神 晃子 様

ア アドバイザーから助言を頂きたい内容

- ・タイムラインの見直し。現在のタイムラインでは、千曲川の立ヶ花観測所で避難判断（水位 7.5m）の段階で、保護者に連絡し、緊急時引渡を行う計画である。立ヶ花観測所の水位は約2時間程度で飯山に到達することを考えるともう少し早く引渡しを実施する必要があると考えているがどうか。
- ・二次避難場所の見直し。現在、千曲川の対岸の城南中学校が二次避難場所になっているが、水位が上がった状態の千曲川を渡って避難するのはリスクが高いと推測する。二次避難場所に避難する場合、2時間経過する前には千曲川を渡って避難することが必要である。また、千曲川を渡らなくても、木島平中学校を二次避難場所に設定することも考えているがどうか。
- ・現在、二次避難場所への避難方法は、職員が個人の車を出して、子どもを乗車して避難する方法であるが、いざとなったときに、本当にそれでよいのか。
- ・学校敷地内に防災倉庫を設置することについて。ハザードマップでは、本校は浸水想定 5～10mの区域に設定されており、敷地内に防災倉庫を設置したとしても浸水の被害にあうことが想定される。垂直避難することを考えれば、校舎2階への設置を考えるが、5～10mの浸水となれば、2階も被害が及びいざというときに防災グッズや備蓄品等が使用できなくなる。防災倉庫をどこに設置したらよいか。

イ 受けたアドバイスの内容

【校舎内外の視察】

- ・有事の際に子どもたちが集まる「安心スペース」を活用した防災教育として、4月当初スタンプラリーで場所の確認と「本当に安全か」考える学習を計画するのはどうか。新しく赴任した職員も学習を通して確認できる。
- ・2階から1階へ降りるスロープの周辺が物置になっている。いざというときに人命にかかわるので別の場所に移動するか、不要なものは廃棄する。
- ・教室／学習室の環境

イ) ロッカー

固定してあるのはよい。ロッカーの上の荷物は滑って落ちやすい。別の場所に移動するか、どうしてもそこに置く場合は滑り止めシートを敷く等対応

が必要。

ロ) 電子黒板

キャスターがついているので有事の際は転がり、子どもにぶつかって怪我をする可能性がある。ロープとカナビラで壁にくくっておく等対応が必要。

ハ) ガラス窓のある扉／ガラス戸のついた戸棚

ガラスには飛散防止フィルムを張る等対応が必要。戸棚のガラス戸は外してもよい。

ニ) 中／高学習室

個別スペースを作るため固定されていないロッカーや倒れやすいパネル等は危険。倒れても危険ではないプラ段等を使用するのがよい。プラ段ならロッカーよりスペースを広く使える。ロッカーは固定する。

ホ) なのはなグループ教室

出口が一つしかない。4～5年前にお伝えしたがそのままになっている。棚の上の荷物の落下防止でネットを貼ってあるのは良い。

ヘ) 調理室

食器棚のガラス戸は飛散防止フィルムを張る。

ト) 木工室

使用しない大型機械は処分する。

チ) 図書館

出入口から入って右の戸棚のガラス戸は飛散防止フィルムを張る。モニタは玄関ホールに移動するのがよい。子どもの活動スペースが広がる。有事の際にモニタで怪我をするリスクがなくなる。

リ) 玄関ホール

モニタは有事の際に移動しないようにロープとカナビラでくくっておく。中学部の屋台は、パネルだけ外して処分したらどうか。

【第二避難場所（城南中学校）の視察】

- ・飯山市指定避難所となっており、体育館（2）柔剣道場（1）かなり広いスペースあり。各階に多目的トイレも完備。教室、特別教室もたくさんあり、避難所としては最高。体育館下の個室には、飯山市の防災備蓄品が保管されていた。
- ・飯山養護の子ども70名、職員80名の約半分が、第二避難場所に移動して実際に過ごすことが推測される。更に、第二避難場所から保護者への引渡しをすることになる。城南中の引渡しは「校庭」、飯山養護学校の引渡しは「体育館」でルートを分けることが可能である。

【防災安全係との懇談】

- ・タイムラインの見直しについて

イ) 現在のタイムライン「千曲川立ヶ花観測所（避難判断水位 7.5m）」となっているが、立ヶ花から飯山まで凡そ2時間で到達するというのであれば、「氾濫注意（5m）」「水防団待機（3m）」に上流で雨が降り続けているという

条件をつけて引き下げてもよい。

- ロ) 保護者へ引渡しの依頼をするときに「安全ならお迎えにきてください」という一文を追記する。
- ハ) 引渡しを開始してから二次避難場所に避難するまでの時間（例えば 90 分）を決めておく。その時点で、職員は配車の準備、物資を運び出す準備をする。
- ニ) 引渡し訓練をする際、詳細の計画はいらない。職員はタイムラインで動けるようにしておくことが必要。配車計画などは防災計画（マニュアル）に掲載しておけばよい。
- ホ) 職員に対し「有事の際、お子さんのお迎えが必要かどうか」調査をしておき、優先度の高い職員は帰宅することができるようにすることも大切。また、学級の子どもが全員引渡し完了した職員は残っている必要はないので帰宅する。教頭は、誰が帰宅したか分かるようにしておく。
- ヘ) 引渡し訓練でなかなかお迎えに来ない保護者に対し、いろいろ言わないことが大切。有事の際は本当にそうなる。よい訓練になる。

・第二避難場所について

- イ) 飯山市の指定避難所であり、多くの人が集まるが、情報も集まる。城南中を第二避難場所とするときのリスクは「千曲川を渡る」「渋滞する」こと。千曲川を渡らない「木島平中学校」も第二避難場所としてもよい。
- ロ) 第二避難場所はいくつあってもよい。状況によって「みんなの命が助かること」を第一優先にして管理職が決定する方法でもよい。そうする場合、各二次避難場所のメリット、デメリットをリスト化しておく判断しやすい。
- ハ) 二次避難場所への移動で「職員の車」「スクールバス」どちらを使うかはどの学校でも課題。スクールバスについては、バス会社と災害時の対応について確認（運転手が近くにいれば災害があったときに来てもらうことができるか）しておく。
- ニ) 職員の車を使う場合、「誰の車を使うか」決めておく必要がある。ワンボックス（大きな車で大人数乗れる）、電気自動車（電気がとれる）等。普段乗り慣れている車であるので運転も安心。学校においておけば水没の可能性があり、自分の車をもって移動できるので車も守れる。
- ホ) 大型免許を持っている職員が、スクールバスを運転することもできるが、乗り慣れていないため、子どもを乗せて移動中に事故等あれば、責任が問われる。

・防災倉庫について

- イ) 現在、防災倉庫がなく、備蓄品は学校のあちこちに置かれている状態。倉庫がなくても、何がどこにあって、誰が持ち出すか決めておけば、防災倉庫はいらない。二次避難場所に何をもっていくか、リスト化しておく必要がある。

ロ) 生徒一人ひとりが学校に「防災リュック」を置いておけば、学校の備蓄品も多なくて済む。「防災リュック」の中身の例として以下のものがある。

☐ 1日分の着替え・下着 ☐ 暇つぶしできるもの ☐ アルミシート

☐ 食料 ☐ 水（学校の備蓄水）☐ 薬（医療的ケアの必要な子どもは1カ月）

このリュックを準備することが防災教育になり家庭の防災力も高まる。

ハ) 数年前実施した「防災ポーチ」は継続してほしい。

ニ) 発電機

医療機器はつながない。バッテリーの充電はよい。

ホ) 吸引器

予備のバッテリーは個人持ち。満充電で何時間使えるかリストにしておく
と万が一の時の目安になる。

ヘ) 学校で蓄電池を購入してもらうのがよい。

ウ 学校として取り組んだ内容(改善点)

・校内外の危険リスクのあるものの改善

☐ 教室のロッカーの上の荷物

☐ ガラス戸に飛散防止フィルムを張る

☐ モニタをロープとカナビラでくくる

4 事業の成果及び今後の課題

(1) 事業の成果 防災アドバイザーより、具体的な助言をいただき、今後の改善の見通しをもつことができた。以下の項目について3学期中に見直し、令和7年度から運用できるようにする。

・教室の高い場所においてある荷物の移動

・スロープの周辺においてある物品の移動及び処分

・タイムラインの見直し

・職員に「有事の際に子どもをお迎えに行くかどうか」の調査を実施

・二次避難場所の選定

・移動方法の確認（スクールバスの使用についてバス会社と確認／職員の自家用車の確認）

・防災備蓄品を一か所にまとめ、リスト化、誰が持ち出すか決めておく

・「防災教育」のカリキュラムを作成する

(2) 今後の課題

ア アドバイザーからの助言を具現化し、職員が行動できる環境づくり

・(1)の各項目について、具現化する。

イ 緊急時引渡し訓練での二次避難場所へ移動する訓練の実施

・毎年実施してきた引渡し訓練は、全て保護者が迎えに来て学校で引渡しをする形式であり、職員及び保護者も見通しをもちスムーズに対応ができている。更に職員及び保護者の防災意識を高めるために二次避難場所へ移動する訓練を実施する。

ウ 避難訓練の在り方

これまでの避難訓練は、決まった避難経路で実施しており、職員や子どもたちもスムーズに対応できている。職員の防災意識をステップアップするために、状況によっては、避難経路が通れない、全校が一カ所に集まらない等の状況をつくって実施することも考えていく。職員が子どもや自分の命を守ることを最優先に考え、状況に応じてその場で臨機応変に判断して対応する経験を通して職員の防災意識を更に高めていきたい。

5 まとめ

今回の防災アドバイザーに校舎内外の視察をし、助言をいただいた。一昨年度、同事業で、防災アドバイザーからの指摘（ロッカーは固定する、高所にモノを置かない、高所のモノが落ちない工夫等）に対応できている箇所も多くあり、その点については、お褒めの言葉を頂いた。

防災アドバイザー来校の翌日の日報で、指摘された箇所を全職員に伝え、対応できることから始めようと呼びかけた。「教室のロッカーの上に置いてあるもの」等ロッカーから下ろして別の場所に移動させた学級もあった。1月の安全点検では、職員に点検のポイントを意識するよう再度呼びかけを行った。職員の防災安全に対する意識を高めていく働きかけが大切であることを改めて実感した。

校舎2階からの避難用スロープ（2か所）が、「物置になっている状況が見受けられる。有事の際、命を救えるかどうかの生命線となる」と指摘をいただいたので、不要なものは処分するよう職員と共有した。防災アドバイザーに指摘される前に、防火管理者としての防災に対する意識を更に高める必要性を改めて実感した。

昨年度から今年度にかけて更新できていない「タイムライン」「防災マニュアル」等ブラッシュアップする。来年度の引渡し訓練は、細案がなくても実施できるようなタイムラインを作成する。更に来年度の引渡し訓練は、二次避難場所への移動まで実施する方向で検討しており、その様子を防災アドバイザーに見ていただき助言を頂きたいと考えている。

今回の助言をもとに、学校の防災管理・防災教育が充実し、有事に生きて働く力として身につくよう、また、子ども、職員及び家庭の防災意識を更に高められるよう安全防災係の先生方を中心に、全職員で取り組んでいきたい。

（文責 教頭 山内 正隆）

令和 6 年度 学校安全総合支援事業

実践報告集

発行年月 令和 7 年 2 月

発 行 者 長野県教育委員会